

こむしこむさ

薩摩治郎八

BONBONで書く以上、フランス菓子のお話をチョッピリでも入れなくては他の諸先生方とバツが合わないなんて、妙な心がまえは持ち合はせない。が私をはじめでパリで食べたのがリュードリポリのランベルミーエルの名菓「モンブラン」だった。十八才の坊やだった。一条公爵夫人経子の方のお供である店に入った。ロンドンからはじめてパリに出てきた日で丁度「ミ・カレーム」の山車が、春とはいえ肌寒いブルバールを袖無ししのピラピラした薄衣の美女をのせて練り歩いていた午後だ。その後およそモンブランと名のつくものを食べたが、この日のものには敵わない。やはり本家本元の舌の味は異う。ほかのモンブランのように甘たろくなく栗の渋味とクリームがシツクリととけ合っていた。子供の頃のシュークリーム、少し後になってスイートポテトを美味と感じたが、その印象までがスツ飛んでしまった。

「デリシューね？」と公爵夫人がパリジャンヌ舌でカブリつく私に得意顔にいった。私はイッチョーライのフランス語で「トレ・デリカ マダム」と答えたら夫人は「本当だわ」と益々御気嫌だった。公爵夫人と横浜からズツと旅先のお供してきた私だったので甘えきっていた。夫人も私を治郎さんと呼ばずゲロさんと呼んでいた。父君が「よい時代」のパリで大使館付武官をしておられ

た頃、パリで育てられただけあって公爵夫人は生粋なパリジャンヌ。しかも少女時代フランスの子供と遊んでいただけあってアルゴ（パリのベランメー）はペラペラ。庶民趣味でガラクタとお祭が何よりも好きなフランセス一条は、その後もシャンゼリゼの「シルダール」などへも、私がロンドンからパリに遊びに来る度毎にひっぱっていつてくれた。公爵は親ゆずりで海軍武官をしていた。大の競馬狂で勝てば大盤振舞、負ければ景気直しと、ブルバールの名料亭「バイヤール」（今は姿を消してしまつたが）や中央市場の「エスカルゴ」（まいまいつぶろ）のお供をした。飛びつきりのシャート・イツケンをガブ飲みにして、ポムリーの黄金の泡で「クレープ・シュエゼット」にタツプリと「グラン・マルニエ」を振りかけさせて、パイッと燃えあがったのを唇にもってゆく味覚はいまだに舌なめずりを覚える。

その当時のパリのハイ・ソサイテーには北伯爵：北白川宮のおしのび名：加賀百万石の前田侯爵夫妻、黒木三次伯爵その少し後になって細川侯爵、徳川頼貞侯爵等の日本のハイソサイテー族のトップ級が、王侯も及ばない豪華な暮らしもしていた。大使館には芦田均元首相が書記官で、芦田夫人は社交界キツての美女の麗名もほしきままにしていた。その後ゲロさんの私が、一條公爵とポール・クロードル大使の仲人で山田伯爵の娘（会津松平家出身）と結婚して、マリ・アントワネットの儀装馬車を造つたベルバレット車造社で、純銀と淡紫のポデーを特製させ、カンヌでエレガンス世界大賞を獲得した。その位のLUXEなど、パリの日本貴族社会にしてみれば爪の垢にもつかぬ気マゲレだった。これもその頃のこと、いまの天皇陛下が摂政宮殿下としてパリに着かれた。





ポール・ラミアンは、レストランの経営者、平和な家庭の父親として、幸福な生活を築いている。

だが、紙幣の偽造という過去の暗い傷が手引きとなって、思いがけない事件の渦の中に巻きこまれた。

監督 モーリス・ラブロ
キャスト リノ・ヴァンチュラ
エステラ・ブラン
ポール・フランクール
ナディーヌ・アラリ

『野獣は放たれた』 仏シネフォニック作品。



前田侯爵夫妻が常宿にしていたホテル・マジエスチックで、御歓迎の大宴会が催された。私もその末席をけがした。陛下は私と同年でいらっしやるから当時は若々しい皇太子さまだった。大テンプルの下真中にデンと、陛下とポアンカレ、大統領の前に、富士山を型どったデコレーションケーキがのせられてあった。なにしても友邦のクラウン・プリンスのお国の、金看板の富士山なのだから素晴らしいドウ・リュックス版だ。陛下も御満悦で「あ、見事」とチョットお手を触られた。途端富士山ケーキが鳴動して大統領メガケで崩れかかり大統領はタンマリ雪の砂糖を頂戴してしまった。従行の人々がこの突然の山崩れにアレよと顔色を変えた瞬間当のポアンカレ、大統領は微笑をたたえながら「殿下の御前で世界の名峰富士山の雪をいただくとは生涯の光栄でございます」これで芽出度く宴を閉ぢた。

若い日の人間天皇の御姿がいまだに眼底に浮んでくる。

当時の報道陣が、何故こんな人間的なあまりに人間的な陛下のエピソードを打電しなかったのか？ 若々しいクラウン・プリンスと老大統領！ 微笑ましい限りではないか？ 日仏親善は富士山の雪よりも固く解けず、不幸な戦争こそあったが、今日までも連メンとして続いているのである。これまたお菓子のもりもったエンである。その後、私はお菓子店からバーの方に足をむけるようになったが、やはり美味な食事に豊麗な葡萄酒の後には、お菓子がなくては完全な食事とは思えない。それにも個性のある心のこもったデッセルだ。又マス近くなッて千辺一率の毒々しいデコレーションケーキの羅列を見る毎に、これはお菓子ではないと思う。

(パリ薩摩会館旧館主)